

最後の一文に着目した問い -三崎亜紀「私」を題材として-

上越教育大学教職大学院院生 新井 翔太

1 問題の所在

本稿では、令和三年度版の教育出版刊行『伝え合う言葉 中学国語 3』に掲載された三崎亜紀著の「私」という教材を取り扱う。本作品は、平成二十八年度版に初掲載され、引き続き令和三年度版にも掲載されている。2011年第24回小説すばる新人賞受賞作家特集に掲載されたのが初出である。三崎(2015)は、教育出版が刊行するエッセイで、政府のマイナンバー制度の導入によって、個人の情報がデータとして一元管理されることに対する危機感に触れつつ、「私が「私」であることは、自分自身にとっては不動の事実なのに、それを他人に説明することはなんと難しいのだろうと。そんなエピソードが、「私」という作品を書くきっかけになった。」と述べている。情報としての個人は、記号としての私であって、現実の私ではない。しかし、その記号が現実の私に害をもたらす可能性があることをこの作品は提示している。インターネットやデータベースなど情報化された社会において、データの私、現実の私、そしてそれを取り巻く問題について、本作品で一貫した読みを形成することを通して考えさせたい。

文学の読みとその交流について、松本(2006)は、「名付けがたいものへの名付けという意味での創造行為であり、関係の中に自己を紡ぎだしていくという意味での創造行為でもある。」と述べており、文学の読みとは、テキストとテキストを関連付け、作品の中には書かれていない読みを創造する行為と、他者との交流の中で自身の読みを創造する行為だとしている。作品の読みを自分なりに創造し、交流の中で、他者との読みを比較することで、自身の読みを再構築していくことにより、一貫した読みの形成が期待される。

また、本作品の勘所の一つとして、最後の一文が挙げられる。最後の一文を意味づける意義として岩崎(2019)は、

教室で行われる読みは、一般的な読書と違い、再読によって、何度もイメージが塗り替えられる。イーザー(1998)はそのような累積的な結びつきを〈雪だるま効果〉と名付け、その効果によってイメージが「読者の中でまとまりをもつようになる」と述べる。結末を意味づけることは、そのような連続した表象行為を起こす契機なのである。

と述べている。本作品では、語り手である私が、物語の最後の一文にて「何の問題もない」と語っており、なぜそのように語ったのかは明かされていない。このテキストを考えるためには、「私」というテキストを自分なりに解釈する必要がある。最後の一文とは、物語の終末にあたるので、その先にテキストは存在せず、それよりも前のテキストを繰り返し読むことで、その解釈を行うことができる。テキストとの関連をどのように読み取るかによって、語り手にとってこのテキストは何を意味しているのか、多様に捉えることができると予想される。それ以前のテキストを関連付けて読み、そのテキスト同士を結束させて

いく行為が、累積的な結びつきであり、最後の一文を意味づけることは、その行為を起こすきっかけになると岩崎（2019）は示している。

したがって、本稿では、三崎亜紀著の「私」を題材とし、最後の一文に着目した問いの設定による、読みの交流を実践し、設定した問いの検証を行う。

2 研究の目的と方法

2. 1 研究の目的

本研究の目的は、三崎亜紀著の「私」における最後の一文に関する問いを案出し、その問いによる読みの交流を通じて、対象者である大学院生・大学生に読みの交流が成立するかを分析・考察することである。

2. 2 研究の方法

本研究は、下記のようなプロセスをとる。

- ① 「私」の最後の一文に関する問いとその問いに正対するための問いの二つを案出し、松本（2010）の読みの交流を促す〈問い〉の五つの要件に照らして、考察する。
- ② その問いを基に大学院生・大学生を対象とした読みの交流を行い、交流中の発話をI.Cレコーダーで記録する。
- ③ 発話をトランスクリプトし発話プロトコル（※注）とし、読みの交流が成立したかどうかについて読みの交流の成立条件に照らして分析・考察する。（成立条件については、「7 読みの交流の分析」にて後述する。）

3 読みの交流を促す〈問い〉の要件について

松本（2010）は、「読みの交流を促す〈問い〉の要件」として五つの要件があるとしている。

- a 表層への着目：テキストの表層的特徴に着目する〈問い〉であること
- b 部分テキストへの着目：部分テキストが指定されていることによって、読みのリソースの共有がなされていること
- c 一貫性方略の共有：部分テキストが他の部分テキストや全体構造との関係の中で説明されるという解釈の一貫性方略（結束性方略）が共有されていること
- d 読みの多様化の保障：読み手によって解釈が異なるという読みの多様化に開かれていること
- e テキストの本質への着目：想定される作者との対話を可能にするようなテキストの勘所に関わるものであること

本稿では、以上の五つの要件に照らし合わせて、問いの検討を行う。

4 教材について

4. 1 作品の特徴

本作品は、主人公である私が語り手である一人称の語りで物語が進行していき、第一場面、第二場面で構成されている。

第一場面では、若い女性が二重登録によって削除されてしまった自分自身を証明する住民情報データの復旧を求めており、それに対し、語り手である私はどちらの住民情報データも内容は一緒であり、残った住民情報データも若い女性のものだとする構図が書かれている。第二場面では、語り手である私が自分の権利を主張するため、入力ミスによって二重になっている個人データの削除を求めており、それに対し、女性司書は個人データが二重なのではなく、あなた自身が二重になっているとし、どちらも同じあなたの個人データだとする構図が書かれている。三崎（2015）が述べていた自分という存在は不動の事実なのに、他者に自分自身だと証明することの難しさが第一場面、第二場面ともに表現されており、本作品の特徴として表れている。

4. 2 本作品における個人データと個人

本作品は、個人データが現実世界での私を証明するものとして位置しており、それに対する考えが私・若い女性・女性司書でそれぞれ異なっている。

若い女性は、現実世界の自分を証明することは、オリジナルの個人データのみだと考えており、コピーされた個人データは自分のものではないと見分けることができる。対して、女性司書は、オリジナルの個人データでもコピーされた個人データでも同じ現実世界の私を証明するものとして捉えており、「あなた自身が二重になって借りられたものと思われます。」という実際にはあり得ないことをよくあることのように語っている。第一場面では若い女性、第二場面では女性司書とやり取りをした私は、物語の結末部にて、「どちらが消えようが、同じ「私」なのだ。何も問題はない。」と語っている。作品を通じて、語り手である私の心情はあまり語られておらず、個人データと現実世界の私との関係をどのように捉えているかについては明かされていない。

4. 3 「」の意味

本作品の表層的な特徴として挙げられるのが、「」付きのテキストである。本作品は、語り手である私が物語を進めていく一人称の語りであり、会話文以外は、全て語り手が語っていると読み進められる。その中で、語りの節々に見られるのが、「」付きのテキストである。例えば、「何らかの「対応」を行ったという「誠意」を見せることで、「解決」へのハードルを下げられる場合が多い。」の「対応」、「誠意」、「解決」というテキストに「」が付けられている。単に、強調するための表現であったとしても、何を強調するために必要だったのかを考えた時に、「」を付けた意味について多様な解釈ができると考える。

また、本作品の中では、私と「私」のように、「」が付いているテキストと付いていないテキストが存在する。このことから、語り手である私は、意識的に私と「私」を使い分けており、それぞれ違う意味で使っている可能性がある。この違いを問うことによって、私と「私」それぞれが持っている意味について考えることができ、読みの方略として機能すると考えられる。

なお、『私』というテキストも出てくる。使われているのは、会話文の中であり、「」の中の「」は二重にするという法則に基づいて表記したのだとも考えられるが、『私』にも私、「私」とは別の意図があって表現されている可能性もある。

5 問いの検討

5. 1 「読みの交流を促す〈問い〉の要件」（松本 2010）に照らした検討

本実践の二つの問いを、以下の五つの要件に照らして検討する。

問い1：「私が「私」であること」とあるが、私と「私」の違いは何だろうか。

問い1：「私が「私」であること」とあるが、私と「私」の違いは何だろうか。		
要件	要件の充足	理由
a 表層への着目	○	私と「私」という表層的な特徴に着目している。
b 部分テキストへの着目	○	私と「私」という部分テキストが指定されており、読みのリソースの共有がなされている。
c 一貫性方略の共有	○	作品全体を通じて私と「私」というテキストが使われており、私と「私」が登場しているテキストに着目し、意味づけを行うことによって、読みの方略を獲得し、作品に一貫した読みの形成が期待できる。
d 読みの多様性の保障	○	「私」以外の「」付きのテキストをどのように捉えるかによって、私と「私」の読みは学習者によって変わると予想される。
e テキストの本質への着目	○	「私」が登場するテキストは、「私」をどう読むかによって解釈することができ、語り手である私がどのように考えているのかを理解することによって、作品の本質に迫ることができる。また、作品の題名が「私」であることから、私と「私」というテキストを理解することが本作品における勘所の一つであるといえる。

問い2： 物語の結末部にて、「どちらが消えようが、同じ「私」なのだ。何の問題もない。」と語っているが、語り手が考えている「問題」とは何だろうか。

問い2：物語の結末部にて、「どちらが消えようが、同じ「私」なのだ。何の問題もない。」と語っているが、語り手が考えている「問題」とは何だろうか。		
要件	要件の充足	理由
a 表層への着目	○	最後の一文という表層的な特徴に着目している。
b 部分テキストへの着目	○	「問題」という部分テキストが指定されており、読みのリソースの共有がなされている。
c 一貫性方略の共有	○	第一場面、第二場面での「若い女性」と「女性司書」とのやり取りを通して、語り手にとって何が「問題」であったのかを解釈することによって、語り手の考えの変容を捉えることができる。
d 読みの多様性の保障	○	「私」をどのように捉えるか次第で、それぞれの「私」としての「問題」をどのように読むかは、学習者によって変わると予想される。
e テキストの本質への着目	○	語り手である私は、「私」にとっての「問題」をどのように捉えているのかを明らかにしていない。その「問題」を読むことによって、語り手の私が「データ」と「私」についてどのよう

		に捉えているのかという作品の本質に気づくことができる。
--	--	-----------------------------

5. 2 最後の一文に焦点を当てた問いとしての検討

今回の問いは、最後の一文である「何の問題もない。」を問いに設定し、語り手である私が「私」にとっての問題をどのように捉えているかを解釈することが必要になる。その解釈のために再読を繰り返し、テキストを関連付けて解釈し、テキスト同士を結束させていながら、作品の一貫した読みを形成することをねらう。しかし、この問い2に正対するためには、「私」についての読みが必要になってくる。そこで、最後の一文についての問いへの準備として、「私」に関する問い1を設定した。それによって、「私」というテキストへの意味づけを行い、その「私」が問題として捉えているものを読むことができる。また、問い2について考えることによって、「私」の意味づけが変わってくる可能性がある。だが、「私」に関する問い1があることによって、問いの往還が生まれ、その往還を繰り返すことにより、一貫した読みを形成し、作品の本質に深く迫ることができると考えられる。

6 読みの交流の実際

読みの交流の活動の実際は次の通りである。

(1)対象：上越教育大学 学部生 4 名 大学院生 6 名(全 3 班)※佐藤研究室ゼミ生

(2)読みの交流の流れ

○活動内容 A：稿者の発言
○全文を読む。
○初読の感想を交流する。
A：読み終えたら、読んでみた感想と疑問に思ったことを交流してください。
○読みの交流を行う。
問い1：「私が「私」であること」とあるが、私と「私」の違いは何だろうか。
問い2：物語の結末部にて、「どちらが消えようが、同じ「私」なのだ。何の問題もない。」と語っているが、語り手が考えている「問題」とは何だろうか。
○全体で交流の内容を振り返る。

7 読みの交流の分析

今回の問いで、読みの交流が成立したかどうかについて、活動中のプロトコルを元に分析する。読みの交流のための認定条件として、松本（2020）は次の三点を挙げている。

①根拠をテキストの中から具体的に示しながら、それぞれの読みが適切な理由づけと共に提示されていること。

②自分自身の読みや他の学習者の読みについて、比較したり相対化したりしながら、メタレベルから言及していること。

③「読み方」（方略）についての何らかの発言があること。

本稿では、これら三つを観点として読みの交流が成立しているか発話プロトコルから確

認し、次に、問い1では私に関する読みについて、問い2では問題に関する解釈について発話プロトコルから質的に分析していく。

7. 1 問い1の分析

7. 1. 1 1班の分析

観点	確認できた発言
①	7FY, 15NM, 22WS, 69WS, 71WS
②	14NM, 19NM, 20FY, 23NM, 28WS, 40FY, 45WS, 74FY, 80FY
③	7FY, 15NM, 23WS, 26FY, 28WS, 45WS, 80FY, 83FY

1班においては、全ての観点におけるそれらが確認できる発言があった。

次に、以下の発話のプロトコルデータから私に関する読みについて質的に分析していく。

1FY ほかの「」されてる単語とかちょっとあの一印つけながら／／共通点とか。

((中略))

7FY 「」なしの私っていうのは、自分が認識している普通に、自分自身私のことで、「」の私っていうのはもう、他の人から認識される私なのかなっていう風に思いました。なんか、最初の役所対応のところで誠意とか解決、対応とかっていうのは、こう誰から見てもこう客観視されるような、模範的な対応、マニュアル的対応みたいな部分で使われてるなと思って。

((中略))

15NM 普通の私は、生身の私？／／自身で、「」私はデータに／／紐づいている私。

((中略))

22WS 私もデータだと思って、なんかその前の考えてみればの一文前で住民情報データと個人がっていうふうに書いてあって、だから個人が「」なしの私で、住民情報データが「」ありの私なのかな？

((中略))

26FY そうか、NM のデータに紐づいた私とデータの私は別／／ですよ。

27NM ／／違う違う違う。

28WS なんかそのさっきの二重の私の存在その

ものが二重になるっていうのもデータとしての私だから／／、データが二重になるっていう意味で使われているのかなっていう。

((中略))

40FY 確かに主観と客観って言葉で説明したんですけど、((中略)) WS の考えに近いのかなって今自分で思いました。

((中略))

71WS : お客さんの話だとここに記されているのは私の名前ではないんですって、／／データだったら名前が同じなら同じでオッケーになるはずなんですけど、「」ありが否定されているのでデータじゃないですか？

((中略))

80FY じゃあ、この来庁した人は、逆の使いかたをしてたりしませんかね。

((中略))

83FY 主人公は生身の私こそ私、データ上の私は「」付き。おそらくこの人にとってデータ上の私が、えっと、なんだろう、本来てか、大事にしたい私で「」がないみたいな。

84NM あ：。そうだね。だけど来庁した彼女にとっては逆。

まず、今回の問いに対して、1FY は他の「」付きのテキストとの共通点を見つけ出し、「」の意味を関連付けて読もうとしている。そして、「」の意味を他者から見られた時の自分自身と意味づけ、私の行動についてはマニュアル的な対応であると読んでいる。15NM は、「私」を「データに紐づいた私」として読み、その読みの方略について、26FY が言及し

ている。22WS は、「住民情報データと個人」というテキストと語り手である私から、語っている私は現実に存在する個人であり、住民情報データは現実に存在する私とは違う私なのだと解釈している。交流する中で、40FY は、WS の「私」はデータだとする考えに近いと発言しており、自分自身の読みを自覚し、考えが似ていることを認知している。また、71WS の発言を受けて、80FY は第一場面での若い女性と主人公の「私」の使い方について言及しており、主人公と若い女性の読み方は逆であるとして、複数のテキストを関連づける方略を使い、本作品における「」の使い方は登場人物によって違っていると読み、主人公である私と「私」について具体的な意味づけをしている。

7. 1. 2 2 班の分析

観点	確認できた発言
①	1MM, 2TM, 3YR, 23TM, 26YR
②	6YR, 20MM
③	1MM, 2TM, 3YR, 23TM, 26YR

2 班においては、全ての観点におけるそれらが確認できる発言があった。

次に、以下の発話のプロトコルデータから私に関する読みについて質的に分析していく。

1MM (前略) もしかしたらそれは全てのデータがなくなってしまうたら、「私」という存在も消えてしまうのではないのだろうか、と書いてあるから、だから「私」はなんか二人目の私、本当の私みたいな。で、「」がない私は話してる私、普段生活してる私なのかなってこの文章では思いました。以上です。

2TM 私もめっちゃ似てるんですけど 「」がない私は自分が自分で思っている私自身、というイメージ。で、「」がついてる私は、((中略)) データも含めた私自身そのものって感じかなと思いました。

3YR ((中略)) 「」なしの私は証明されていない状態の私で、「」がある私はいろんな資料とかデータで証明されている私で、存在の確定、不確定性というものがあるなって感じですね。

((中略))

20MM TM はどっからそう思ったの? / / 根拠は?

((中略))

23TM ここに、こうして市役所になんか自分がこの「」の私を証明できるのは、役所にデータがあるからこそだ、みたい。とか、データ関係の時に「」の私がよく出てくるなって、なんか図書館の時の 41 ページの真ん中くらいにも「もう一人の私」で「」が出てくるんですよ。でもこれもデータの話からきてるから、なんか「」の私はデータのある私なのかなって。

((中略))

26YR この人って他にも「」つけてる、謝意とか督促状とかって話が出たじゃないですか。((中略)) この人なりの謝意があったり、その人なりの督促状があったり、みたいのがあるって考えた時に「私」も同じように「」がついているって考えるなら特別さ、なんか不変、なんか、なんていうんだろう、特別っていうのをこう強調するために、なんか私だけのみたいな意味合いの意味で私って「」つけてるのかなあっていうのも感じましたね。

1MM は、「もしかししたら、それら全てのデータがなくなってしまうたら、「私」という存在そのものも消えてしまうのではないだろうか?」というテキストを根拠とし、「私」を本当の私、私を普段生活している時の私として読んでいた。その解釈については、言語化するのが難しいと話しているが、交流中の内容をみると、「私」のデータが消されていて、そのデータが本当の私だと MM は発言しているので、主人公である私についてではな

く、第一場面での若い女性についての解釈だと考えられる。2TM, 3YR については、それぞれ自分の解釈を発言し、その根拠となっている「私」の読みについては、23TM, 26YR にて発言している。23TM については、20MM の働きかけによって生まれた発話であり、23TM は、データ関係の時に「私」よく出てくることを根拠として、「私」はデータの私として読んでいることが分かる。また、26YR は、「謝意」「督促状」に着目し、「」を使うことは特別だという事を強調するためだと関連づけて読んでおり、「私」も唯一性を持った私だとしている。

7. 1. 3 3班の分析

観点	確認できた発言
①	6WT, 8KM, 17UT, 18UT, 29WT, 30WT, 31WT, 36WT
②	13KM, 15UT, 23WT, 24WT, 29WT, 32WT, 36WT, 38WT, 40WT
③	4WT, 8KM, 21UT, 33WT, 42WT

3班においては、すべての観点におけるそれらが確認できる発言があった。
次に、以下の発話のプロトコルデータから私に関する読みについて質的に分析していく。

8KM なんかに「」はなんかキーワード／／って感じとかが多いなあって言うのは普通に感じていて
((中略)) 私はまあ自分でもわかっている私だし、存在している私で消せない私、オリジナルな私だけど、かっこの私は変えようと思えば変えられる？／／
なんか私だけど中は私じゃなくても私みたいな。
((中略))

15UT 私割とその逆かもしれない。
((中略))

17UT これまでの督促状に「」がついてることは何も考えずに考えたからだと思うんだけど、どっちかっていうと「」ついている方が私の、私の方がオリジナルで消せない方だと思った＝
((中略))

21UT ＝強調されてる感じがするから、なんかどっちかっていうといろんな捉え方ができるのは「」ついてない方なんじゃないかなと思いました。
((中略))

29WT うん、まあどっちも理解できる。((中略))

データとして役所で扱うその人、として表現するために「」をつけているからこっこの「」の方が代わりがきく、今回みたいに削除できるし、重複させちゃうこともできるのも納得できるし
((中略))

31WT その、一番最初の私は一人称としての私で、強調するためにこれこそが私ですよ、これこそがオリジナルですよって意味で「」をつけたっていうのも納得できるから
((中略))

33WT 「」私ってのがオリジナルですっていう考えの方が、なんか本当の私は消えてしまうのか、データがなくなったら本当の自分が消えてしまうのかどうかって考えさせた方がしっくりくる。((中略)) データが消えてしまったら代わりがきく私っていう存在そのものが消えてしまうのではないかってのはあまりこうその、なんか重要性が(3)薄くなるのかなと。

8KM は、「」が本作品に多く登場していることを感じていて、「」の中の言葉はキーワードのようなものとして捉えている。私について置き換えて考えた時に、私は存在していて変えることができないもの、「私」は、データのようなもので変えようと思えば変えられるものとして読んでいます。その 8KM に対し、15UT は、自分の意見は逆であると発言しており、17UT は、「私」は、オリジナルであり、消せないものだとして捉えている。その根拠として、21UT は、「」によって強調されていることが特別という意味を持たせている

としている。8KM と 17UT の発言を聞いたうえで、29WT・31WT は、8KM の読みも 17UT の読みもどちらも読みとして理解できるものだと発言しており、それぞれの読み方を自分で行い、自分なりの根拠を提示している。そのうえで、33WT は、「私」をオリジナルと解釈し、現実存在する私を証明できるのは私のデータであり、そのデータが消えれば私の存在を証明するものが無くなってしまい、存在が消えたのも同然になってしまうと解釈している。

7. 2 問い2の分析

7. 2. 1 1班の分析

観点	確認できた発言
①	4NM, 6NM, 10NM, 14FY, 16WS, 32WS, 68FY
②	13NM, 20FY, 21NM, 22WS, 24FY, 38NM, 48WS, 59NM, 63FY
③	4NM, 8NM, 10NM, 14FY, 29WS, 53NM, 57NM, 61NM

1班においては、すべての観点におけるそれらが確認できる発言があった。
次に、以下の発言のプロトコルデータから問題に関する解釈について質的に分析していく。

4NM データとしての私だとした場合、((中略))
データの私がどちらが削除されたとしても問題はないって自分は思っているよ。

((中略))

10NM 私自身だとしたなら、((中略))データがどうであろうと、私は揺るがず私ですよ、何の問題もない

((中略))

13NM だからこの私が何かによって、なんか解釈が変わってくるような感じがする。

14FY ((中略))何もついてない私が主観的な私で／／「」付きが客観視されてるというか他の人から見られてる私っていうのがまだちょっと頭にあるんですけど、((中略))誰にどう認識されようが私は私だから、自分は自分で変わらないから、何も問題はない、みたいな

((中略))

16WS この、主人公にとっては、データが二つあるっていうことが問題なのかなって／／読み取ったので、なので、それが解消されたら、もう自分にとって損することっていうか、害はない、で問題はないのかな。

((中略))

29WS その「」の私が、そのデータの私だしたら、なんか、その、彼女にこの文を置き換えられてしまったら、データとして残ってれば、生身の自分は消えてもいいみたいな(笑)、になっちゃうのかなって

((中略))

57NM 彼女の立場だったら、問題はあるけど、でも、彼女の立場が、凡人には理解できないよね(笑)

((中略))

61NM 凡人には理解できない、データと個人を結び付ける感覚を持っている人を登場させることによって、そのデータ、の、持つ意味を考えさせようとした作品。(笑)

((中略))

68FY もしかしたらそれら全てのデータがなくなってしまうたら、私という存在そのものも消えてしまうのではないだろうかって言ってるんで、((中略))問題は何かって聞かれたら、二重登録も問題ですし、そのデータがなくなってしまうことも問題ですし、その両方になってないので、何も問題はないのかなって。

NM は、「私」が「データだった場合」と「私自身だった場合」でそれぞれの読みから考えられる問題とは何なのかを具体的に示しており、13NM で、「私」の読みによって、解

釈が変わることを示している。この NM の「私自身だった場合」という読みは、問い 1 の交流を終えた後に、各班での交流内容を発表した際に、3 班から挙げた読みであり、1 班では挙げなかった新たな読み方の話題提起をしている。この読みに対し、14FY は問い 1 で形成した具体的な「私」を使い、問題に対する解釈を行っている。16WS は、語り手である私、「私」から、「私」というデータが二つあることが問題であり、現実存在する私が損をしている状態を解消できれば、何の問題もないという解釈をしている。29WS で主人公と若い女性が使っている「私」について、同じ読みだと、話が矛盾してしまうのではないかと考えているが、57NM は、「若い女性の立場は、凡人には理解できない」と、若い女性を凡人には理解できない存在として読んでいる。また、61NM は、この作品の意味についての言及をしており、本作品の主題に迫っている。そして、68FY は、14FY とは違った解釈を発言しているので、自分の読みと他者の読みを比較し、自分の読みを再構築したことによる発話だと考えられるので、交流によって読みを変容させたのだと捉えられる。

7. 2. 2 2 班の分析

観点	確認できた発言
①	1MM, 7YR, 9YR, 11YR, 17YR, 21YR, 29TM, 35MM
②	3MM, 11YR, 12MM, 25MM, 26YR, 33YR
③	7YR, 32TM, 35MM, 37MM

2 班においては、すべての観点におけるそれらが確認できる発言があった。

次に、以下の発話のプロトコルデータから問題に関する解釈について質的に分析していく。

7YR 私の定義を変えたい感じになってくるな、「私」はデータの、本当の私、証明された私。

((中略))

9YR この人は ((中略)) データ上の私っていうのが、二重、二つあることに對して、「私」なしの私は別に、疑問を感じているわけじゃない ((中略)) でも「私」の私のデータが二つ以上存在することには意義を唱えるじゃないけど、満足、納得いってない。データ上で 2 個 3 個あろうと最後どっち消えてもいいよって言っとるようにどっちも別、そこにこだわりはない、でもデータにいない私は、私でしかないですよ。

((中略))

29TM = なんか今ふとおもったのは ((中略)) 市役所のくだりで私、喋ってる人、私がデータが二重でどっちを消そうが別にどっちでもいいじゃん、みたいなスタンスやったのが、なんか自分が図書館でデータが二重になってしまったっていうのを経

験してなんかそのデータに対する私の大切さ？

((中略))

32TM 捉え方がちょっと変わったのかなって今ふと思ったんですけど

33YR はいはい、なるほどね。自分も実際そういう感じになって、図書館でね。

((中略))

35MM なんかさ、SF チックって言ったじゃん／／図書館じゃない、市役所のくだりは普通に読めた、図書館でさ二人？みたいなこと言った瞬間に SF になった。 ((中略)) それの認識で読んじやうともう SF になっちゃうよね頭の中で最初っから。だからこの人は特殊能力を持ってるんじゃないか＝

((中略))

37MM だから、自分の本当の、なんだよ。最初のデータ、元のデータがわかるみたいなさ、なんかそうなっちゃうなんか読んで。

7YR は、問い1での「私」という定義を変えたいという発言をしている。これは、問い2に正対した際、問い1で「私」を「唯一の私」としていたが、交流の中で挙げた「データ上の私」と読むことで矛盾なく一貫した読みを形成することができると判断したのだと考えられる。その上で、私という存在は現実に一人しかいない為、「私」がデータ上に何個あっても現実に影響はないが、データ上での「私」は自分が二人いる状態になり、それが「問題」だという解釈をしている。32TM は、作品を通して主人公のスタンスが変わったという読み方をしており、その変容によってデータに対する私の大切さを感じ、二重になっていることが問題なのだとしている。また、35MM は、図書館の場面で女性司書の「あなたが二重になっている」というテキストから、本作品を SF のようなものとして読んでいたと発言しており、人間的な問題ではないかとしている。

7. 2. 3 3班の分析

観点	確認できた発言
①	2UT, 4UT, 19KM, 22KM, 31WT, 34WT, 52UT
②	3WT, 9UT, 19KM, 25KM, 26KM, 31WT, 58UT, 61WT, 63WT
③	12KM, 22KM, 29UT, 33WT, 48KM, 50UT

3班においては、すべての観点におけるそれらが確認できる発言があった。
次に、以下の発話のプロトコルデータから問題に関する解釈について質的に分析していく。

4UT 問題がある状態っていうのは、私っていう存在が消えてしまうこと？だけど、その心配はなかったっていうか、

((中略))

19KM 私の問題がある状態っていうのは、なんか2個ある状態？だから2個あることによって、なんかその、この人によって不都合が起きる状態が、この人にとって問題のある状態で、たとえ本当の自分が消されてしまったとしても、んでコピーの自分が残ってたとしても、それで自分に、今後不都合が起きないのなら、問題はない／／っていう人なのかなあって。

((中略))

29UT なんかイメージ的に影分身的な感じで、本体を消されたら分身側も消える／／っていうかそういうイメージでいたから、

((中略))

31WT KMの近くに、((中略)) たとえ私そのもののデータとしても、消されても、主観的に私という生身の肉体は残っているから、データだとしても、そのデータで使う私、なんかその一番最初に

登録したそのもののデータを消されたとしてもその主観的には何も問題はない。

((中略))

34WT これタイトルは私で、この主人公の人はこの作品を通して、私ってこういう人ですって私の存在っていうか私はこういう人ですって言ってるもんだと思っていて、((中略)) 別に私の主張とか行動とか対応が何も問題なく受け入れられるんなら、それがもう、たとえデータが1と2両方消されたとしても何も問題はない。

((中略))

48KM =読み方が一貫してその人の読み方ならそれで取れるし、違う読み方なら違うふうに取れるし、／／確かに WT が言ってくれたみたいに自己紹介文みたいに捉えるならそれもありだなあと。

((中略))

50UT なんかすごい私の癖なんだけどすごい感情移入して読んじゃうんだよね＝

((中略))

52UT =だからこれを読んだ時にシュレッダーのシーンがとても響いたというか

4UT は、「私」をオリジナルの私と考えており、その「私」の問題は、私という存在が消えてしまうことだと解釈している。KM は、「私」の読みについて主人公と若い女性を比較して、それぞれの場合の問題を考えていた。19KM で、主人公である私にとっての問題は、データが二つある状態で、たとえオリジナルが消されてコピーが残ったとしても、データが一つであれば、問題はないと解釈している。それに対し、29UT は、オリジナルのデータが消えたら現実の自分も消えてしまうことが問題だと読んでいたと発言し、KM との読みの違いに気づいている。31WT は、「住民情報データ」と「私」から、私の証明する住民情報データが一つでもあれば、現実には存在する私には何も影響がないので、問題はないという解釈をしている。また、34WT は、問い1で「私」をオリジナルとしており、本作品を私の存在を主張する物語だとして、私の主張がデータの私によって通らないことが問題であり、私の主張が受け入れられるのであれば、データが消されたとしても何も問題は無いと解釈している。また、48KM は、問い2を考える際に、一貫した読みが形成されていれば、どのような読み方でも、解釈することができると発言しており、本作品の読みには多様な解釈があり得ると考えたのだと思われる。

8 考察

今回は、最後の一文である「何の問題もない。」という語りに着目する問い2と、その問いの解釈に必要な「私」というテキストに着目する問い1の二つを設定した。それぞれの問いに対して、WS と WT を例に挙げ、発話が起こった要因について考察していく。

問い1では主に、「データの私」と「オリジナルとしての私」という読みがあった。そのような発話が生まれた要因として、問いの設定と教材の特徴が挙げられる。

問いの設定では、注目せずとも「私」というテキストは表層的な特徴として捉えることができるが、私と「私」の意味をそれぞれ考えることによって、理解しがたいテキストに対し、明確な読みを持って解釈することができた。WS は、私を個人、「私」をデータの私と読み、若い女性の主張である「ここに記されているのは、「私」の名前ではない」というテキストを関連付け、そこに記されているデータは、若い女性を証明するデータではないと解釈し、一貫した読みを形成している。

教材の特徴に関して、本作品では個人データと個人が物語の中心となっているため、私と「私」の違いという問いに対し、個人データと個人という選択肢が浮かび上がってくる。WT はどちらの選択肢も当てはまるものだと考えており、33WT で、「私」を個人データとすると、「「私」の存在が消えてしまうのでは」というテキストの重要性が薄れてくるとして、「私」を個人として読み、重要性があるという関連づけを行っている。以上の二つの要因によって、問い1の発話が生まれたのだと考えられる。

問い2では、大きく分けて「二重になっていること」「現実の私に影響があること」の二つの読みがあった。そのような発話が生まれた要因として、問い1での「私」の読みと他のテキストとの結束が挙げられる。

WS は、問い1で形成した「私」と第二場面で私が二重になっており、正しい主張が通っていないことから、「私」というデータが二つあることが問題であり、現実には存在する私が損をしている状態を解消できれば、何の問題もないという解釈をしている。これは、問い1での「私」とその他のテキストを結束させて解釈したと考えられる。WT は、「住民情報データ」と「私」から、私の証明する住民情報データが一つでもあれば、現実には存在する私には何も影響がないので、問題はないという解釈をしている。また、「「正当な主張」をする利用者」「適切な対応を取られたこと」「模範的な市民対応」「私」作品名

である私から、私は正当な主張をして、それに適切な対応をしてもらえたことに満足した部分と前半の模範的な市民対応を私は行っていることから、この作品名の私の存在を紹介しているようなのだと解釈し、私の行動や主張が通らないことがあることが問題であり、データを消すことによって自分の行動や主張が問題なく受け入れられるのであれば、本物でもコピーでも現実存在する私にとっては何の問題もないと解釈している。以上の二つの要因によって、問い2の発話が生まれたのだと考えられる。

8 結論

今回の問いによって、全ての班において、松本（2020）の示す読みの交流の認定条件を満たす発話がみられたため、この二つの問いは読みの交流を促す問いであるといえる。また、本作品にとって、「」という表層的な特徴に着目することによって、テキスト内の「」が表現している意味について考えることになる。また、「私」「問題」に対し、テキストを関連付けて読み、そのテキスト同士を結束させていく行為によって、学習者が作品の一貫した読みを創造するできた。

本稿の実践から本作品において結末を意味づけることは、岩崎（2019）の述べていた「連続した表象行為を起こす契機」であったといえる。

注

※プロトコルの表記方法は、松本（2015）の表記方法に準ずる。

<記述の方法>

発話の単位は、間と内容（提題表現＋叙述表現）によって認定する。内容的に一連の発話は連続して記述する。

発話には発話番号を付す。内容的形式的に一連の発話はひとまとまりとする。

発話者をアルファベットで示す。

漢字・平仮名・片仮名交じりで表記する。

<記号>

／／ 発話の重なり。直後の／／のあとの発話が重なっている。

= 途切れない発話の重なり。直後の＝のあとの発話がつながっている。

() 聞き取り不能。中に記述がある場合は、聞き取りが不完全で確定できない内容。

(3) 3秒の沈黙

(.) 「、」で表記できないごく短い沈黙。

: : 直前の音がのびている。「:」がおおよそ0.5～1秒の長さを示す。

— 直前の音が不完全なまま途切れている。

、 発話中の短い間。プロソディー上の何らかの区切りの表示を伴う。

? 語尾の上昇。

。 陳述の区切り。語尾の下降などのプロソディー上の区切りの表示を伴う。

—— 下線部の音の強調（音の大きさ）

。。 間の音が小さい。

(笑) 笑い声ないし笑いながらの発話。

(()) 注記。

文献

- (1) 岩崎直哉 (2019) 「物語教材における最後の一文を意味付ける意義一語りを読み一貫性を形成する過程の研究」『全国大学国語教育学会国語科教育研究：大会研究発表要旨集』第 136 巻, 59-60
- (2) 教育出版 (2021) 『伝え合う言葉 中学国語 3 教師用指導書 教材研究編 上』, 116-117
- (3) 松本修 (2006) 『文学の読みと交流のナラトロジー』東洋館出版, 19
- (4) 松本修 (2010) 「読みの交流を促す「問い」の条件」『臨床教科教育学会誌』第 10 巻第 1 号, 77
- (5) 松本修 (2015) 『読みの交流と言語活動 国語科学習デザインと実践』玉川大学出版, 5
- (6) 松本修 (2020) 『中学校・高等学校国語科 その問いは、文学の授業をデザインする』明治図書出版, 135-136
- (7) 三崎亜紀 (2011) 「私」『小説すばる』2011 年 12 号 集英社, 152-157
- (8) 三崎亜紀 (2015) 「私が「私」であること」『中学国語通信 道標』2015 年秋第 31 号 教育出版, 2-3